

こことからだにチームでのぞむ 慢性疼痛ケースブック

明智龍男, 杉浦健之 ● 編著

〔評者〕 矢吹省司 (福島医大教授・疼痛医学)

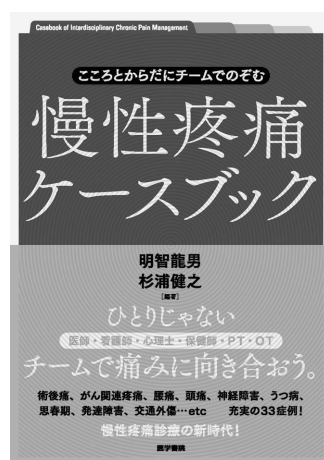
本書は、慢性疼痛患者を診療する医療者が参考にできる事例集が中心となっている。8章から成っており、1章：慢性痛を知る、2章：慢性痛をどう評価するか、3章：慢性痛の臨床—エビデンスの治療と原則、そして4～8章：ケースブック、という構成である。

まず、慢性痛を理解し、どのように評価し、そしてどのような治療があるのかを1～3章で知ることができる。これらの章の各項目には、「Point」があり、その項目のまとめが記載されている。そこを読んでいくだけでも内容をある程度理解できるようになっている。そして4章：ICD-11分類に基づく慢性痛、5章：精神疾患と併発する慢性痛、6章：ライフステージと慢性痛、7章：臨床で気を付けたい慢性痛、および8章：慢性痛診療のアプローチで、具体的に事例を挙げて病態の評価の結果とそれをもとにどのような治療方針を立てるのかについて記載されている。共通していることは、(1)いち医師だけの評価や治療では限界がある、(2)多くの専門家がそれぞれの視点で評価し、それをカンファレンスでディスカッションすることで的確な治療方針が見えてくる、そして(3)多面的に治療することで複雑な慢性痛であっても改善(痛みの程度そのものに変化がなくてもADLや

QOLは改善)できる可能性がある、ということである。

事例の多くは、著者らの名市大病院いたみセンターでの症例であると思われる。患者の生育歴を含め、さまざまな情報を収集し、各専門家が分析して診断し治療に結びつけている様子が実際にカンファレンスに参加しているように理解できるような記載になっている。「Review—評価のポイントはどこだったのか」には、評価を行う際に考えた具体的なポイントが記載されておりとても参考になる。Case 1 から Case 33 まであり、読者は自分がかかわっている慢性痛患者と似た Case が見つかると思う。所々に「リソースが十分でない施設での痛み診療」という記載もあり、なかなか多職種で診療にあたれない施設の場合の対応に関しても配慮されている。

慢性痛患者の病態をどう考えて、どのように治療方針を立てて、どう治療していくか、一律にいかないのが慢性痛診療の難しさである。著者らは苦労してこのいたみセンターを立ち上げ、軌道に乗せてきたと思われる。われわれ読者は、そのエッセンスをこの本を読むことで得ることができる。悩みながら慢性痛診療に頑張っている医療者全てに読んでいただき、明日からの診療に役立てていただきたい一冊である。



B5・304頁 2021年7月

定価：4,730円

(本体4,300円+税)

[ISBN978-4-260-04335-9]

医学書院刊